

平成 29 年度 中原第 4 号墳出土品 市指定文化財記念シンポジウム

中原第 4 号墳の 被葬者に迫る



2018

富士市・富士市教育委員会

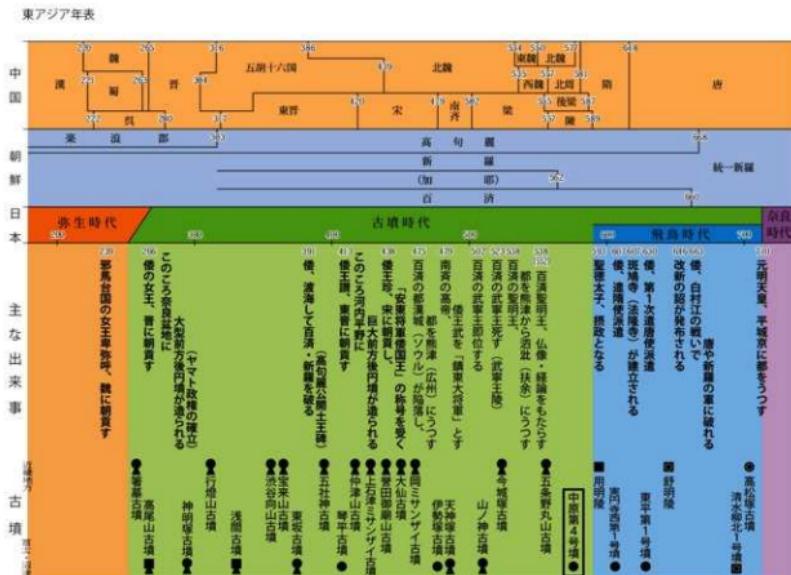
例　　言

- (1) 本書は、平成 30(2018)年 1月 21日(日)に開催される『中原第4号墳出土品 市指定文化財記念シンポジウム「中原第4号墳の被葬者に迫る」』の資料集である。
- (2) シンポジウムの企画および資料集の編集は、市民部文化振興課文化財担当職員が担当した。
- (3) 古墳の正式名称は「中原第4号墳」であるが、一部、「第」を省略して表記した部分もある。

目　　次

6・7世紀の手工業生産と地域の編成
 中原第4号墳の調査成果と古墳時代の富士
 中原4号墳の石室
 中原4号墳の埋葬と儀礼
 中原4号墳出土の玉
 馬具・刀剣からみた中原4号墳の被葬者像
 中原4号墳の鉄器について
 生産用具からさぐる中原4号墳の被葬者像
 中原4号墳出土須恵器の様相

菱田 哲郎(京都府立大学教授)	1
佐藤祐樹(富士市文化振興課)	2
藤村 翔(富士山かぐや姫ミュージアム)	8
田村隆太郎(菊川市教育委員会)	10
戸根宏治(加賀市教育委員会)	12
大谷宏治(静岡県教育委員会)	14
菊池吉修(静岡県教育委員会)	18
鈴木一有(浜松市文化財課)	20
和田達也(浜松市文化財課)	24



6・7世紀の手工業生産と 地域の編成

京都府立大学 菊田哲郎

富士市の中原第4号墳は、独特の横穴式石室をもつ円墳であるが、豊富な副葬品をもち、地域を代表する有力者が埋葬されたと推測される。この6世紀には、各地の開発が進められるとともに、豪族たちによる造墓も活発におこなわれており、新しい技術を入手した豪族たちが開発の中心にあったと見ることができる。副葬品として、都からもたらされるものも多く含まれ、刀剣や矢束などは、王権との関係を物語る文物として副葬されたと推測される。豪族たちが都との間の交通をおこなっていたことが地域の開発にとっても重要な役割を果たしていたと推測される。

中原古墳群が築造された6世紀という時代は、筑紫君磐井の反乱のような軋轢もみとめられるものの、王権による地方支配が充実し、国造や作造として豪族たちが位置づけられるとともに、王権に奉仕する拠点としての屯倉も各地に配置されるようになっていった。もちろん、地域ごとに王権との関係には違いがあったと考えられるが、屯倉が水田経営のみならず、交通の拠点でもあったように、都を起点とする交通が全国に及んでいたことは確実である。したがって、交通の要衝がまず王権と深い関係をもつことが観察されることも多い。

王権との関係を古墳などの遺跡・遺物から探することは、必ずしも容易ではない。在地的な要素がさまざまなものに見られ、たとえば王権との関係の深さを石室の形態から推し量るというわけにはいかないからである。しかしながら、副葬品の中に王権との関係を示すものは看取でき、豪族の直接的な交通によるのか、交通路を通ってのものの流通によるのかという点はあるけれども、一定の関係を想定することができる。文献を援用するならば、舎人や采女のように、地方豪族の子女が中央に出仕することは普通に見られ、また蘇我氏や物部氏といった中央の豪族に従属する形で地方の豪族が中央に出向く場合も確認されている。このような交通により、さまざまな文物が都から各地にもたらされたことは確實視できる。

7世紀以降、各地の豪族たちは伝統的な勢力として、郡に住じられていくことになる。一ヶ郡に有力豪族が複数存在する事例も史料から確認でき、郡司層に成長した豪族は、各郡に数氏あったとみてよい。中原古墳群の場合も、富士郡内の有力者の一つとして位置づけることができ、在地貴族として奈良平安時代へと続いたのではないだろうか。逆に言うと、律令期の地域の基盤が6世紀に形成されていると言え、その開発の中心になった豪族たちが、古代を通して地域を代表する勢力になっていったと推測できる。このような有力者の消長を遺跡は語ってくれるのである。



6世紀後半の東アジア



中原第4号墳の位置

中原第4号墳の調査成果と 古墳時代の富士

佐藤祐樹

はじめに

中原第4号墳は富士山南麓の伝法沢に所在する古墳時代後期後半（6世紀後半）の横穴式石室墳です。72基程度のまとまりのある伝法古墳群のうちの1基です。長らく存在が知られていませんでしたが、平成4（1993）年、倉庫を建てるために実施した調査によって、初めて存在が知られることとなりました。今回は調査成果をお伝えするとともに、当時の富士市域の状況も紹介します。

1. 調査成果

中原第4号墳を特徴付ける点は3点あります。

- ①6世紀後半（570年前後か）に造られ、富士ではもっとも古い横穴式石室という埋葬施設をもつこと。
- ②石室が作られてから、一度も盗掘にあっていない状況で発掘されたこと。（埋葬状況の把握）
- ③豊富な副葬品が出土し、そこから被葬者の性格などを

知ることができる貴重な遺物が出土したこと。

それぞれの詳しい内容については、①の横穴式石室については藤村氏、②の埋葬状況については田村氏、③の各出土遺物については、戸根氏、大谷氏、菊池氏、鈴木氏、和田氏から報告があります。

墳丘について 墳丘盛土は、大部分が失われております。一部横穴式石室の裏込め埋土が残存するのみでした。周溝は南側の一部を除いて全周している事が確認され、西側の周溝上端幅は1.68m、下端幅1.01m、東側は1.75m、1.11mあります。墳丘規模は、周溝内側では東西10.88m、南北10.46m、周溝を含めた総長は東西14.47m、南北13.77mがあります。

石室について 墓坑は2段に掘削され、すべての石材が墓坑の内側の段の内部に設置されており、石室が地下下に埋められる地下式構造と言えます。また、最大の特徴は開口部に地山の掘り込みと石を用いた段構造という東陵河で流行する構造です。段構造とは、石室の中に入れる際に、階段を下りるように一段段差がある構造を言います。石室は、全長5.52m、玄室長4.59m、玄室幅1.13m（中央）、1.07m（奥壁）、1.16m（玄門幅）。



図1 中原4号墳 周溝・石室接出状況（南より）



図2 石室右（西）側壁（南より）



図3 石室床面遺物出土状況（南より）



図4 石室床面中央から奥壁側遺物出土状況（南より）



図5 石室床面奥壁前遺物出土状況（南より）



図6 石室床面中央やや奥壁寄り大刀、玉類出土状況（南より）



図7 石室床面奥壁前左隅遺物出土状況（南より）



図8 石室床面中央やや開口部寄り遺物出土状況（西より）



図9 石室床面中央より開口部側遺物出土状況（北より）



図10 石室床面中央より開口部側遺物出土状況（西より）

副葬品について 中原第4号墳は未盗掘の横穴式石室と考えられ、それゆえに副葬品の残存率が高く、また、埋葬時の状況をそのまま残していると考えられます。加えて副葬品は初葬時のものが多く、出土した鍛冶具や農具を始めとした生産用具などの副葬品組成は被葬者の職掌を考えるうえで貴重な調査資料です。それぞれの特徴について以下にまとめます。

【装身具】すべて玉類。勾玉12、管玉22、切子玉24、^{セイカク} 球玉6、白玉8、丸玉（土製のもの）115、小玉（ガラス製のもの）232。玉類はまとめて出土しており、副葬時の状況を良好に残していることから、耳環はもとから副葬されなかつた可能性が高いと言えます。

【刀剣類】大刀2、剣1が認められる。大刀は^{だんぢやんさなばりすきうちづくらわ} 鎧象嵌装八雲跨付大刀と無雲跨付大刀、剣は^{だんぢやんさなばりすきうちづくらわ} 鹿角装銀象嵌装六雲跨付剣。

【鐵器】最低131本が出土。全体で鐵身形態からみた構成は、平根式43本、尖根式54本になる。古墳時代をとおして、駿河・伊豆では、1基あたりの最多出土量です。

【農工具】砥石2、鍔鋤先4、斧3、鎌5、鑿1が認

められます。また、鎌は基部数から推定される副葬数は3点以上、刀子は刀部数から10点が副葬されたと考えられる。ただし、刀子10点のうち被葬者佩用品6点と工具4点に区別することもできます。

【鍛冶具】鉄鉗が1点出土している。東海地方での出土例としては唯一であり、被葬者像を考える上で注目されます。

【生産用具】錠子1、針14があります。錠子は化粧用具（毛抜き）など属性の強い佩用品もしくは、皮革の毛を抜いたりする道具の可能性が考えられます。

【馬具】^{マツヅク} 鞍3、^{マツカシ} 遊冶金具2、^{マツカシ} 帯飾金具6、^{マツカシ} 銀留金具2、^{マツカシ} 鉢4のほかに雲珠の可能性がある破片が1点出土しています。轡は、^{カネコ} 駿府鏡立圓環状鏡板付轡1、^{カネコ} 小型類形立圓環状鏡板付轡1、大型類形立圓環状鏡板付轡1が出土している。鐘呂金具は擬似鏡表現のあるもので対をなすものです。

【土器】須恵器29のほか、土器環1が出土しています。須恵器の内訳は、^{カネコ} 环蓋3、^{カネコ} 环身9、^{カネコ} 瓶6、^{カネコ} 短頸瓶3、把手付碗1、提瓶5、横瓶2である。瓶の出土数の多さと渡来系の可能性がある把手付碗が注目されます。

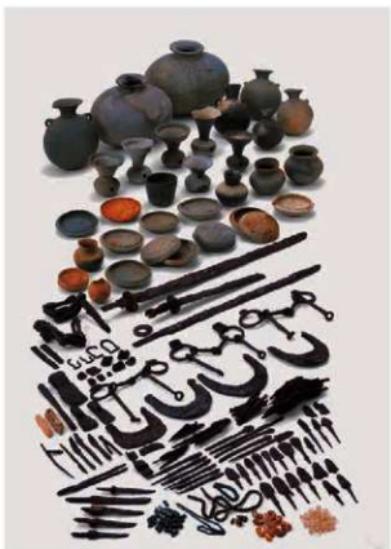


図11 中原4号墳出土遺物集合



図12 中原4号墳出土 装身具



图 13 中原 4 号填出土 武器



图 14 中原 4 号填出土 马具



图 15 中原 4 号填出土 農工具、鍛冶具・生產用具等



图 16 中原 4 号填出土 土器

2. 周辺の古墳

中原第4号墳を含む伝法古墳群のあり方を整理する
と以下のようになります。

伝法古墳群の展開は古墳時代中期末頃（5世紀末）の伊勢塚古墳の築造が契機となっています。潤井川流域において初めて築造された大型古墳の被葬者には低地部開発の先駆者が想定され、また、築造の背景には王権の地域支配の一端を読み取れます。周辺に造られた「銚塚」や「兜塚」と呼ばれる古墳の築造時期が判明しませんが、おそらく6世紀代の古墳と考えられ盟主墳である伊勢塚古墳の周辺に造られた陪塚のようなものであったと推測されます。

その後、伝法沢においてつくられるのが、沢を跨った場所に位置する中原第4号墳です。この6世紀後半頃の築造と考えられる古墳には、それまでに当該地域では認められない横穴式石室という新たな埋葬形態を導入しており、新たな葬送概念も導入されたことを示しています。つづいて7世紀に入り横沢古墳が、やはり伝法沢

を強く意識した場所に築造されます。7世紀中葉以降、伝法沢の東側、現在の広見公園周辺や伊勢塚古墳の北東側に展開し始めるようになり、8世紀前葉まで築造が続けられるようです。

3. 古墳の築造と集落の消長

潤井川流域における本格的な集落形成は5世紀後半における沢東A遺跡にみることができます。沢東A遺跡においては、石製模造品の出土や須恵器の流入など、あらたな権力を背景とした技術や思想などの外的要因により集落形成がなされたと考えられています。一方で、その時期における東平遺跡では集落の形成はほとんど認められないといえます。これは、同じ時期に築造された伊勢塚古墳を盟主墳として、その時期に古墳周辺に集落が作られなかったことによるものと考えられます。

6世紀に入り、やはり潤井川流域における中心的な集落は沢東A遺跡で、一部に中柄・中ノ坪遺跡における集落形成が開始されます。中原第4号墳が作られた6世紀後半までは、建物跡は決して多くはないものの潤井川

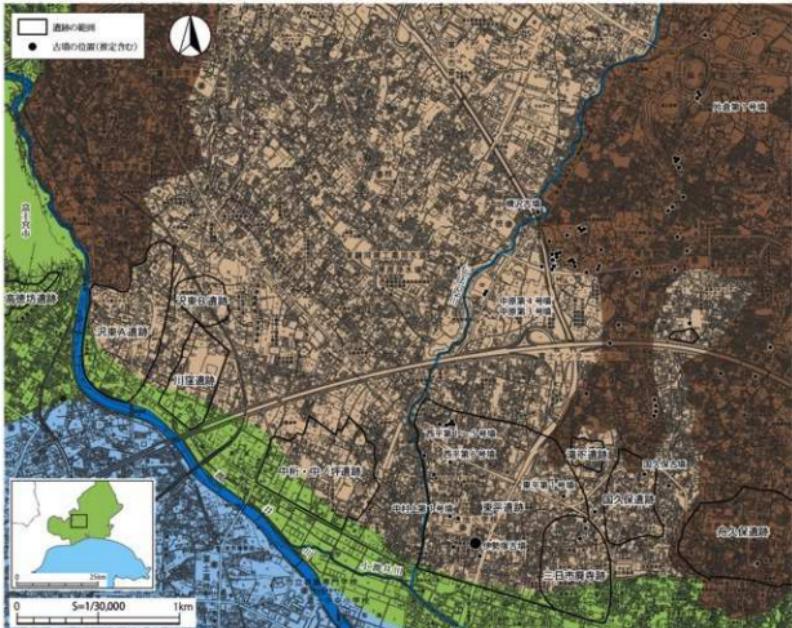


図17 周辺遺跡分布図

流域において6世紀後半の建物跡は沢東A遺跡に限られており、現段階では沢東A遺跡と3km程度離れた伝法沢周辺に展開を見せ始める古墳のあり方に直接的関係が想定されます。生活域の中心としての沢東A遺跡に「ミヤケ」のような施設が存在し、伝法沢を境界として伊勢塚古墳築造以降、墓域としての空間認識がされ続けていたとも考えられます。

6世紀末から7世紀初頭に位置づけられる横澤古墳を境として伝法古墳群における古墳のあり方は階層性が等質化されるようです。

7世紀前半は伝法古墳群が伝法沢の左岸において面的な広がりを見せ始める頃で、沢東A遺跡では依然、建物数が際立って多い。その時期に中柵・中ノ坪遺跡などにおいても集落は継続して認められ、東平遺跡でも7世紀に入りようやく本格的な集落形成が開始しており、伝法古墳群が広がりをみせ始める時期と一致しています。

7世紀後半に入るとこれまで中心的な集落であった沢東A遺跡は集落形成が下火となり、伝法古墳群の広がりとともにその中心は東平遺跡に移っています。

8世紀に入ると完全に集落の中心は、駿河国富士郡家である東平遺跡に移る中、その頃までも伝法古墳群では造墓活動が継続して行われており、郡家における官人層という被葬者が想定される西平1号墳のように、8世紀後半頃にはその活動を終えます。

伝法古墳群が終焉を迎えた9世紀に入ると富士郡家東平遺跡でも、建物数が減少し始め、9世紀後半には遺跡中心部分では、ほとんど建物が認められなくなります。これは貞觀六～七年（864～865）に富士山で起きた『貞觀の大噴火』とも関係している可能性があり、「扶桑略記」延喜2年（902）9月26日には「駿河国云上富士郡官舎為群盗被燒亡之山」という記事も不安定な社会状況と人々の不満の表れとみられ、ここに郡司支配からの脱却という新たな社会ステージの幕開けを示しています。

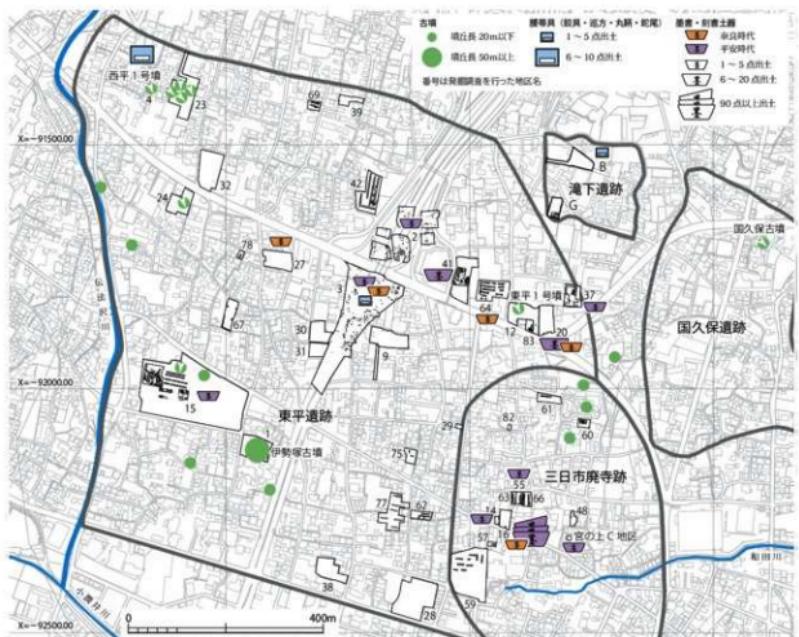


図18 東平遺跡の調査区と官衙関連遺物の出土状況

横穴式石室からみた

中原4号墳の被葬者像

藤村 翔

横穴式石室の特徴と築造工程

中原4号墳の埋葬施設は、全長5.6m、奥壁幅1.0m、開口部幅1.0mの無袖形横穴式石室であり、地下式となる構造から、横穴式横口式石室とも呼ばれる。

石室の構築手順としては、始めに深い長方形の墓坑を掘り、その内部に落とし込むように壁面の石材が3段程度積まれる。石材には近接する伝法沢川周辺で採取された河原石が利用され、裏込めには礫と土が併用された。この石室を特徴づける開口部の石積み（段構造）は、壁面の石材とみ合わせて最下段が初期段階に配されている。壁面上部は新たに拡張された上段墓坑内に収まるよう1～2段程度積まれた後、天井石が架構され、それを覆う程度に埴丘盛土がなされる。埋葬時には開口部が墓道状に掘り返され、石室内への埋葬や副葬品の配置が完了した後、段構造の上段部分が壁状に仕上げられ、さらに塊石による閉塞がおこなわれたと考えられる。



図1 中原4号墳の構築過程

遠江～駿河中部地域の横穴式石室が地上式で、羨道から玄室までが平らな場合が多いことを鑑みると、墓室が地下に築かれる中原4号墳の石室はやや異質な印象を受けるかもしれない。ただ、横穴系埋葬の本場である中国や朝鮮半島では墓室が地下に築かれることが主流であり、それは「黄泉の國」が地下世界に広がっているとする考え方に基づく。その点においては、中原4号墳のような石室は本来の思想に忠実であり、渡来人に関連する可能性のある石室構造ということもできるだろう。また、石室が地下にあるため、上部を被覆する埴丘盛土の総量は少なくて済む。併せて壁面の石材や天井石架構の際の作業高は低くなり、石室構築の際の労力は総じて低く見えることができたとみられる。省エネ・省コスト化を果たしたこの種の石室は、上位権力によって古墳の規模や築造コストに関する規制が働いた結果とみることもできるかもしれない。

駿河東部地域のなかの中原4号墳

中原4号墳は、伝法沢川の周辺とその東側の低丘陵部に6世紀後葉から8世紀初頭にかけて広く展開する伝法古墳群内の一基として捉えられ、現状ではその中でもいち早く横穴式石室を採用した古墳である。また駿河東部地域の範囲でみても、最初期の横穴式石室としての地位は揺るがず、7世紀以後も中原4号墳と共に無袖形の平面形態や開口部に段構造を有した石室が広く築かれた点を鑑みれば、その後の地域集団の墓制にも大きな影響を与えた古墳と評価できる。ポスト中原4号墳世代である7世紀初頭前後には、石室全長が8～11m程度の大型石室と4～6m程度の中型石室に分化し、駿河東部地域のそれぞれの古墳群において大型石室をトップとする階層序列が完成する。大型石室には各集団の指導者層が葬られたと考えられるが、駿河東部地域全体を統べるような首長は現れず、各集団が駿河中部地域や甲斐地域の大首長層などを介して、ヤマト王権の管理下におかれていたとみられる。さらに一古墳群内に多様な形式の装飾付大刀や優位の副葬品目が分散し、それらが中型石室からも多く出土する点を考慮すれば、各集団単位のみならず、個人レベルでもヤマト王権を構成する有力氏族や地域の大首長層と直接関わり、その恩恵を受けた可能性も想定される。

無袖石室の列島的展開と中原4号墳

中原4号墳が築かれた6世紀後葉という時期は、ヤマト王権が主導した、横穴式石室の形態と規模によって表現される階層秩序の整備が、飛躍的に前進する時期である。無袖石室や堅穴系横口式石室は、一般的には下位階層の墓制と考えられるが、当該期に整備された階層システムに組み込まれることで、列島の広範囲に展開したことと推定される。特に中原4号墳と共に通る有段の無袖石室（堅穴系横口式石室）は、伊予や伯善、大和などの西日本諸地域や朝鮮半島南東部のほか、三河や相模、武藏、下野といった東海～東日本諸地域にも類例が分布しており、先の思想的侧面も含め、渡来人と関わる埋葬施設の特徴であった可能性がある。東日本諸地域においては、5世紀～6世紀前半までに積石塚の古墳群が形成された古東山道ルートとその周辺を軸に、6世紀後半にはそのルートの延長や補完を目的とするような太平洋沿岸の要衝に有段の無袖石室が築かれた状況が看取される。

また、無袖石室が地域内最上位層の古墳に採用された駿河東部、信濃南部、上総の諸地域は、交通上の要衝である点も共通している。各地の無袖石室を築いた集団には馬の生産や鉄器製作を担った渡来系の技術者も含まれ

た可能性が指摘されているが、首長墓級の無袖石室被葬者層はそのような技術者たちを統括する一方で、交通路を掌握することで彼らの作った製品の流通を管理する働きも担っていた可能性もある。

まとめ

中原4号墳は、大陸伝来の新しいスタイルの埋葬施設であった横穴式石室を駿河東部地域ではいち早く採用した、非常に先進的な古墳である。類似した石室が朝鮮半島から列島各地へと広がった点からは、ヤマト王権によって各種手工業に関わる渡来系技術者やその管理者が再編され、列島各地へと派遣された状況が推定される。中原4号墳の被葬者も、そうした任務を担って駿河東部地域へ赴いた指導者の一人と考えられよう。石室の諸特徴は7世紀の駿河東部地域の古墳にも広く受け継がれ、各集団からは石室は中型でも、中原4号墳のように目を引く副葬品を有した人物が数多く輩出された。中原4号墳の被葬者は、その後の地域社会の発展を方向づけた英雄として、後世まで語り継がれるような人物であったのかもしれない。

※参考文献等は「伝法 中原古墳群」筆者考察を参照。

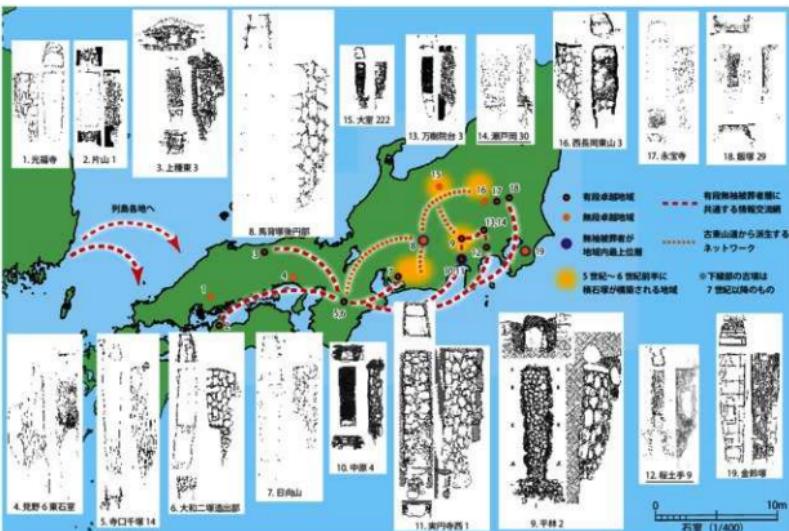


図2 6世紀後葉を中心とした無袖石室の展開

中原 4 号墳の埋葬と儀礼

田村隆太郎

中原 4 号墳の石室内では、埋葬された人体や布、木材は腐り、土の中ではほとんど消失していました。しかし、若干の痕跡は認められています。また、ガラス製や土製の玉、多くの金属製品や土器が、後世の盗掘や亂発が少ない状態で出土しています。そこで、発掘調査の詳細な記録をもとに、石室内で行われた埋葬とそれに伴う儀礼などについて復元してみました。

埋葬主体の復元　まず、埋葬主体（埋葬された被葬者）の配置を復元してみましょう。棺や人体はほとんど残っていませんでしたが、粉状になった骨や歯、装身具であったと判断できる玉類の分布、かたわらに置かれたであろう刀剣の配置から検討することができます。

検討の結果、石室の奥半部と前半部の両方に埋葬主体の存在が確認できます。さらに、奥半部では 2 体が頭を逆方向（逆頭位）にして、一部重複するように隣接していましたと復元できます。副葬品の編年的位置から、頭を奥に向かって埋葬①は 6 世紀後葉の初葬（最初の埋葬）、頭を前に向けた埋葬②は 6 世紀末葉頃の追葬に位置づけることができます。

石室前半部の埋葬主体（埋葬③）については、頭位などの判断は難しいですが、石室内への出入りを邪魔する

場所にあり、散在する副葬品（鉄鏃や土器片）の上に埋葬主体の骨片があることから、奥半部の埋葬よりも新しい段階のものと考えられます。

副葬の様相　副葬品の多くは、埋葬①・②に伴うものと判断できます。それぞれの埋葬主体のかたわらには刀剣が置かれ、その他にも鉄鏃や馬具、農工具、土器などが多く副葬されています。詳細にみると、石室の奥半部と前半部とでは、副葬品の種類や土器の器種に違いがあることもわかります。

一方、新しい段階の埋葬③には副葬品がほとんどなく、埋葬①・②との埋葬方法や被葬者像の違いを推測することができます。

片づけと儀礼行為　石室の奥壁寄りでは、多くの鉄製品が集積された状態で出土していました。これらは埋葬①の副葬品であると判断でき、埋葬②に際して奥壁寄りに片づけられたものと考えられます。

さらに、ここには埋葬主体に伴う装身具とは異なる土玉が出土しており、儀礼的に土玉を用いた可能性が考えられます。また、歯の可能性がある小片が出土したという記録もあります。埋葬主体の場所に大きな乱れはありませんが、遺体の一部を移動した可能性は考えられます。

副葬品の破壊行為　石室の前半部では、鉄鏃や土器などが大きく破壊され、周囲に敷き寄せられた状況を把握することができます。土器片の分布状況などをみると、埋葬③の位置にあった副葬品が対象になっていることがわかります。したがって、埋葬③に伴う片づけであった

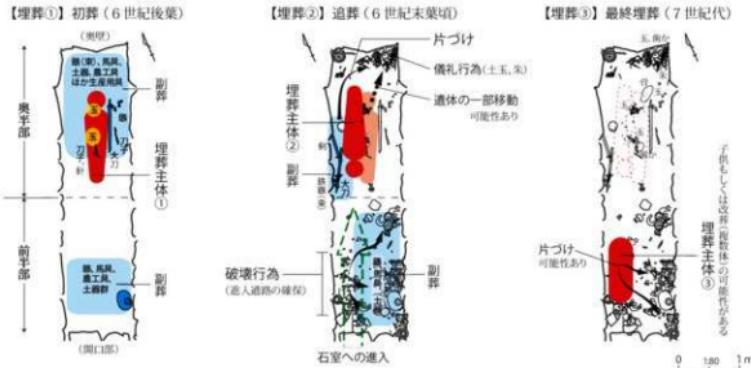


図1 中原 4 号墳の理葬等の復元

可能性も考えられます。

しかし、鉄鏃や土器片が広く散在する状態は、難に破壊したりかけたりした行動がうかがえ、石室奥壁寄りの周到に集積した片づけとは大きく異なります。この違いを評価するならば、追葬に伴う片づけではなく、石室奥へ進入する際の破壊行為であった可能性も指摘でき、その必要は埋葬②の段階に生じたと考えられます。

埋葬方法からみた被葬者像 中原4号墳の被葬者は3人以上になりますが、埋葬①の被葬者が古墳建築のきっかけとなった人物です。そして、横穴式石室を採用して多くの土器を持ち込んだ埋葬は、この地域ではそれまでなかった埋葬方法であったと評価できます。

さらに、20年程後に追葬される埋葬②の人物は、埋葬①と近い関係にあったと推測されますが、重複するように隣接させた配置が特徴です。横穴式石室では、ある程度の空間の中に追葬することは珍しいことではありません。しかし、九州地方北部や近畿地方西部などでは、古墳時代前・中期において、石棺の狭い空間に追葬する同棺埋葬があったことが確認されています。その中には、



図2 同棺埋葬の例
兵庫県坪井遺跡2号墳1号主体部
(兵庫県教育委員会2003「カヤガ谷遺跡群 大西遺跡群 幕開発跡」)

埋葬①と埋葬②のように頭位を逆にするものもあります。中原4号墳の埋葬①と埋葬②には、こうした遠地の埋葬習俗が横穴式石室の出現と伝播、導入を経ながら持ち込まれている可能性も考えられます。

なお、遺体の一部を移動した可能性についても、同様に石棺や横穴式石室において確認されています。この行為の背景には、先葬者に対する高い社会的評価と畏敬があったものと推測できます。



図3 石室前半部の遺物出土状況（奥側から撮影）

土器群からみた儀礼の特徴 土器の副葬は、横穴式石室の普及とともに多く認められるようになりますが、駿河東部ではその導入初期にあたる中原4号墳において、すでに多くの土器が副葬されていました(和田報告参照)。

埋葬主体に近い石室奥半部には、壺などが各所に置かれています。それに対して、埋葬主体から離れた前半部では、环や甕(胸部に小孔のある壺形土器)、瓶類などの土器群を把握することができ、多くの飲食器を用いた葬送儀礼の様子がうかがえます。その土器群を他の古墳と比べると、

- ① 豊富な器種組成(环類、壺瓶類、甕など)
- ② 脚付器種(器台、脚付壺、高环)の欠如
- ③ 鹿を多く含む

という特徴をあげることができます。①からは有力者に対する儀礼の様子がうかがえます。②は最上位の首長に比べて階層的に劣る評価になります。③の特徴は特異的であり、類例をみても階層秩序との関係では説明できません。鹿は古墳時代中期の須恵器出現以降、古墳の儀礼の土器群では1~数個は含まれる特徴的な器種でもあります。新来の埋葬施設と埋葬習俗を持ち込んだ特異な被葬者の葬送に対して、また、新たな群集墳への契機として、その特異性や新興性を象徴するように鹿を多用する儀礼を志向したのではないでしょうか。

*参考文献等は『伝法 中原古墳群』筆者考察を参照。



中原 4 号墳出土の玉



戸根比呂子

中原 4 号墳からは、表 1・図 1 で示すとおり各種玉が出土している。ここでは石製を中心とした丸玉・白玉及びガラス小玉の組成の特徴を紹介し、その意義を検討する。

表 1 中原 4 号墳出土の玉

種類	材質	A 部	B-NE 部	B-N 部	B-S 部	計
勾玉	瑪瑙			11	1	12
白玉	碧玉		2	2	18	22
切子玉	水晶			23	1	24
	翡翠				1	1
青玉	琥珀			2	1	3
	上	2				
白玉	滑石				7	7
	碧玉			1	1	2
丸玉	土	115				115
小玉	ガラス			30	202	232
	計	117	2	68	232	419

* 同意継続数 (645) 内から出土した 5 点を除む。

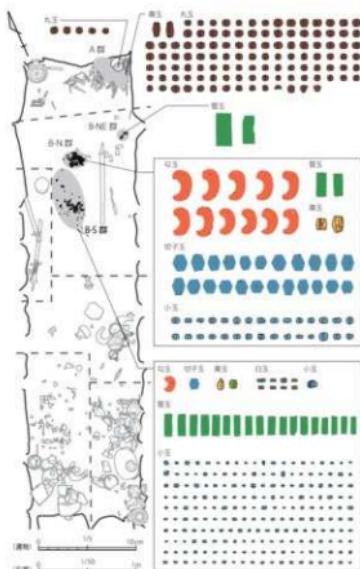


図 1 中原 4 号墳玉類出土状況図

1. 丸玉・白玉の材質組成と特徴 [図 3]

東海地方では、三河以東に東海系の玉である蛇紋岩製丸玉が見られる。尾張以西においては、土製丸玉が主体を占める。土製丸玉は三河以東においても一定量が出土しているが、三河と遠江においては 3 ~ 4 割を占めている一方で、さらに東方の駿河においては 1 割に満たない。また、土製丸玉、蛇紋岩製丸玉に次いで出土量の多いのが滑石製白玉で、伊勢地域では 1 割を超える。

中原 4 号墳では、土製丸玉が 9 割以上、滑石製白玉が 1 割弱となり、蛇紋岩製丸玉は含まれない。この組成は、尾張以西の特徴に近い。

2. ガラス製小玉の製作技法・材質組成の特徴 [図 4]

ガラス製小玉は、製作技法や色調からの分類が可能である。今回は、肉眼観察によって東海地方各所の資料を分類するため、巻き付け技法・鉛ガラス (Group II B)、巻き付け技法・ナトロンタイプのソーダガラス (S 1 B)、連珠法・ソーダガラス (S)、分割研磨法・高アルミナタイプのカリガラス (P II)、鋳型法 (BM)、引き伸ばし技法・カリ又はソーダガラス (P / S)、引き伸ばし技法・



図 2 石室床面中央やや奥壁寄り大刀、玉類出土状況 (南より)

高アルミナタイプのソーダガラス（S II B）、とした。

東海地方では、三河以東では鋳型法（BM）の割合が、少なくとも 3 割、多ければ 6 割以上を占める。反対に、尾張以西においては、引き伸ばし技法・カリ又はソーダガラス（P/S）が主体を占める。また、数量は決して多くないが、西遠江以東で Group S I B が一定量あるのに対し、三河以西では僅少である。

中原 4 号墳出土のガラス製小玉は、引き伸ばし技法（P/S）が 8 割以上、鋳型法（BM）は 2 割弱にとどまる。また、Group S I B も出土しておらず、尾張以西の特徴に似ている。

3. 組成の特徴にみる中原 4 号墳出土の玉の意義

前項のとおり、中原 4 号墳出土の玉の組成は、東海地方の中でも尾張以西の特徴と共通している。その意義について検討する。

石製丸玉のうち蛇紋岩製の玉は、これまで生産地が発見されていない。しかし、その消費地の分布状況は明らかに偏っており、三河以東のどこかに生産地が存在していた可能性が高い。また、この時期のガラス製小玉は、

基本的には舶載品に限定されていた一方で、鋳型を用いた小玉の生産は国内でも行われていた。鋳型は畿内を中心に出土しているが、東海地方においても静岡県沼津市の中原道路から鋳型が出土しており、鋳型法によるガラス製小玉を生産していた可能性がある。

このように生産地と消費地の関係を假定すると、地域性の高い玉の有無は、そのままその被葬者がその地域と密接なつながりがあるか否かと結びつくことになる。すなわち、中原 4 号墳の被葬者は尾張以西の勢力と密接なつながりを持っていた、と推定することができる。反対に、蛇紋岩製の丸玉を持たず、鋳型によるガラス製小玉の割合が低いことは、在地勢力との関係の希薄さを示すのであろう。

さらに、こうした地域性の高い玉がどのような時代背景の中で生産されるようになったかによって、その意味合いも大きく変わる。例えば、地域性の低い玉、広域に流通する玉の代替品なのであれば、それを入手できない、入手が難しいことの裏返しであり、広域流通品に対する権力の弱さを示すことになるが、地域の結束の象徴として生産が開始したのであれば、その有無が地域の中での力の強弱を示し得る。

このように考えると、中原 4 号墳の被葬者は少なくとも在地勢力というよりは、尾張以西の勢力とのつながりが強かった人物である、と推定できるのである。

参考文献

- 大賀 克彦 2002a 「弥生・古墳時代の玉」『考古資料大観』9 弥生・古墳時代 石器・石製品・骨角器 小学館 pp.313-320
大賀 克彦 2002b 「日本列島におけるガラス小玉の変遷」『小羽山古墳群』(『清水町文化財発掘調査報告書』V) 福井県清水町教育委員会 pp.1-20
田中 清美 2007 「たこ焼き型鋳型によるガラス小玉の生産」『研究記要』第 6 号 大阪歴史博物館 pp.1-24
田村 刑美 2015 「引き伸ばし法によるガラス小玉の系譜と伝播」『物質文化』第 95 集 pp.19-32
戸根 比呂子 2008 「東海系」の玉の流通『玉文化』第 5 号 日本玉文化研究会 pp.45-64

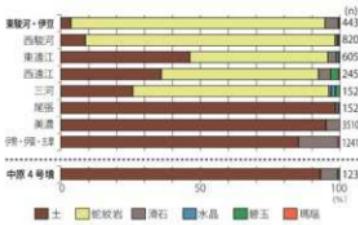


図 3 丸玉・白玉の地域別材質組成

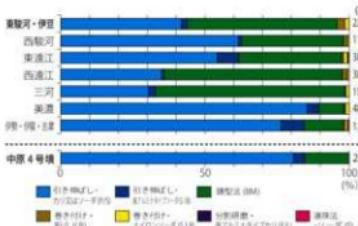


図 4 ガラス製小玉の地域別材質組成

馬具・刀剣からみた

中原4号墳の被葬者像

大谷宏治

中原4号墳の出土遺物は、遺物の出土位置や時期的位置づけの分析によって、6世紀後半と7世紀末～7世紀初頭のものに区分できます。当古墳の被葬者は人骨の出土位置から3人と想定されますが、馬具と刀剣類は初葬者（6世紀後半）と追葬者（7世紀末）に副葬されたものであることがわかりました（図1、富士市2016）。

ここでは数多くの出土遺物の中から馬具と刀剣を取り上げ、中原4号墳の被葬者像について考えます。

1. 馬具からみる被葬者像

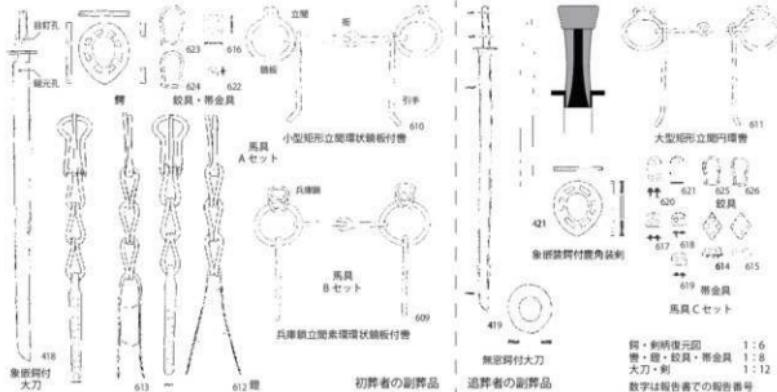
馬具は、図1のとおり、鉄製環状鏡板付樽（以下、内輪）と木製蓋の吊金具、帶金具、鞍具（パックル）です。この種類の樽は装饰性が乏しく、報告書などでは鉄製樽として一括して扱われることもありますが、立間の有無や種類、鏡板・引手・衝の連結方法等によって複数種類に区分できます。中原4号墳から出土した樽はよく見ると、小さな方形の立間がつくるものと、兵庫鏡が取り付くもの、大型の立間が取り付くものの3種があり、全く同じものが3点副葬されたわけではないことがわかります。ではこの形態的な違いに意味があるのか、それぞれの特徴を分布などからみてみたいと思います。

分布からみた特徴 まず、兵庫鏡立間素環円環樽ですが、全国では100例強が確認でき、6世紀前半から7世紀前半まで副葬され、東日本よりも西日本に多い傾向にあります（図2）。特に愛媛（松山・今治）に集中します。中原4号墳は愛媛地域とは石室の特徴が類似し、また農工具の副葬が多いことなど、共通点が確認できます（富士市2016の藤村氏、鈴木氏論考）。

また、兵庫鏡立間素環円環樽と分布傾向が類似する樽として瓢形円環樽があります。瓢形円環樽は、兵庫鏡立間素環円環樽が多く出土する愛媛や岡山に集中します。さらに瓢形円環樽が出土した古墳は小規模古墳でありながら、鐵鏡沿関連遺物が副葬されることが多いことが注目できます。瓢形円環樽は兵庫鏡立間素環円環樽から派生した可能性が高く、両者を副葬する古墳には関連性が考えられ、その関連性とは鍛冶技術を有する（大谷2008）ことではないかと考えます。それを証明するように中原4号墳では鍛冶具が出土しています。

つぎに、小型矩形立間円環樽ですが、円環樽1200点の中で100例に満たないもので、本来は吊金具や兵庫鏡が取り付くものですが、この樽にはそれらがありません。同様の類例は20例ほどで、分布をみると（図2）、九州と東海に多い傾向にありますが、兵庫鏡立間素環円環樽とは分布の傾向が異なるため、別の職業（役割）などの共通性があるのではないかと考えています。

さらに、鍔は鏡に見えるように内側からたたき出した疑似鍔をもつものですが、これは全国的に10例ほどの



出土で近畿地方で変遷が見えることから畿内王権から配布されたものと考えています（大谷 2016）。

このように馬具からみると初葬者は鍛冶技術などをもって畿内王権と結びつきをもっていたと考えます。

一方、追葬者に副葬された大型矩形立聞円環轡は、6世紀後半以降日本列島で最も多く出土する轡のひとつで、東駿河で最も多く出土する轡のひとつです。上記の2者が東駿河では唯一の事例であるのに対し、大型矩形立聞円環轡は東駿河で一般的な轡です（図3）。また、大型矩形立聞円環轡は、馬具が多く出土し、牧の存在が推定される群馬、長野、山梨で多く確認されるため、東駿河にも牧がおかれた可能性が考えられます。さらに、鉄製轡は金銅装轡より実用的な馬具と考えられ、大型矩形立聞円環轡は規格性が高く、生産地が限られたか、畿内王権からの見本をもとに地方で生産された可能性が想定されます。それらが集中する東駿河は、王権に直属する騎馬軍団が存在した可能性が想定されています（岡安 1986）ので、追葬者は、東駿河の他集団と規格性の高い轡を共有し、王権の軍事的な側面を担ったと考えます。

階層的位置 中原4号墳では3種類の轡が出土し、それぞれで特徴が異なることを明らかにしました。しかし、一方で3者に共通するのは、辻金具・雲珠や杏葉という装飾性の高い馬具を有さないことです。中原4号墳の出土馬具からどのように馬に装着していたかを図4に復元しました。顔の部分（面繫）のみに金属製の馬具を用いる簡素なもので、「面繫馬装」と呼ばれることもあります。同時期の県内の古墳である、掛川市宇洞ヶ谷横穴墓や静岡市駿賀山古墳では、豪華な金銅装馬具が副葬されています。このように同時期の古墳と比較すると、馬具の材質や種類などから階層的には上位に位置づけることはできないことがわかります。

3組の馬具からみた被葬者像 中原4号墳のように鉄製轡を3組も有する古墳は国内を見渡しても多くはない、県内では最上位の古墳である駿賀山古墳に次ぐ多さです。宮代栄一氏は小規模でありながら鉄製馬具を複数副葬する古墳は馬具が多く出土する長野県に多いことから馬匹生産を担った集団と関係する（宮代 2015）と指摘していますので、3組出土の中原4号墳の被葬者集団は馬匹生産にも関係していたことが想定されます。

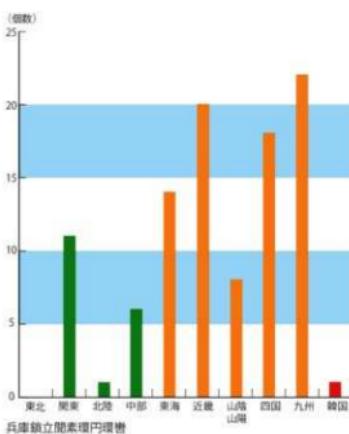
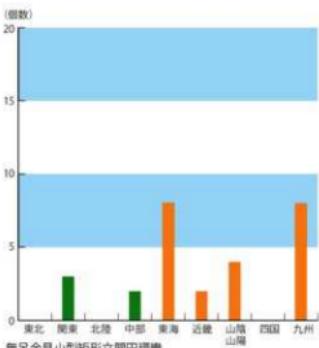


図2 初葬者に副葬された轡の分布

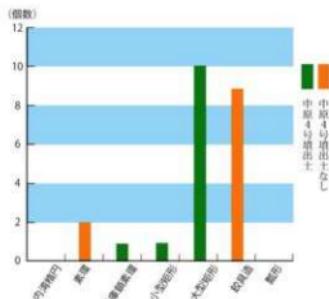
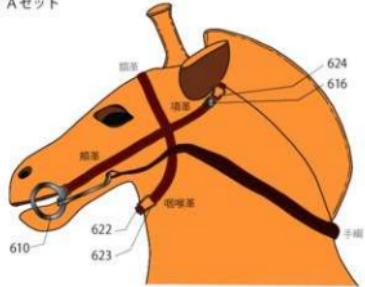


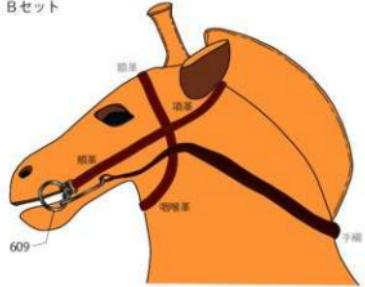
図3 東駿河の環状鐵板付轡の種類別出土数



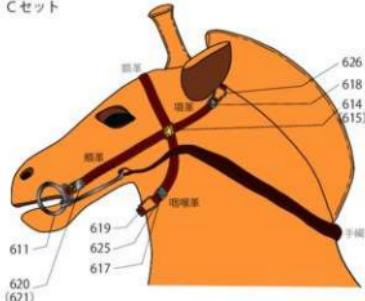
Aセット



Bセット



Cセット



0 30cm

図4 中原4号墳出土馬具各セットの馬装復元

2. 刀剣からみた被葬者像

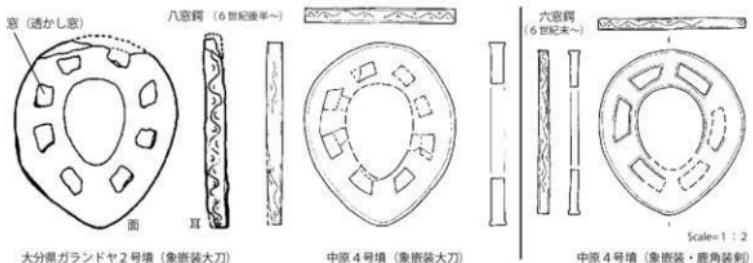
初葬者は象嵌装付大刀、追葬者には象嵌装付鹿角装剣、剣付大刀が副葬されています。象嵌剣はいずれも剣の側面（耳）に蛇行する線（波）とその波の間にC字形の文様を施すもの（波状C字文）です（図5）。八窓剣と六窓剣があり、6世紀後半に八窓剣が、6世紀末以降に六窓剣が出現します。波状C字文象嵌装付大刀の特徴を見ると中原4号墳と同時期の図6の1～3をみると、孔（縫合孔）、剣、目釘の位置がほぼ同様であることがわかります。つまり、これらの大刀は規格性が高く、かつ全国的に分布することから、大型矩形立闇円環櫛同様、畿内王権から配布されたと考えます。

一方、追葬者に副葬された象嵌装付鹿角装剣は、日本列島で1例のみの出土です。古墳時代前期・中期には剣の副葬が多く行われますが、古墳時代後期（6世紀以降）に激減し、これまでには奈良県藤ノ木古墳出土の豪奢な装飾付剣が注目される程度でしたので、中原4号墳の位置づけを探るにあたり全国的な集成をしたところ、剣は大刀の1%にも満たない数ですが、日本列島で40例程出土していることがわかりました。剣はこのように古墳時代後期には最先端の武器ではなくったと考えられる一方で、40例も副葬され、かつ藤ノ木古墳や中原4号墳のように最先端の装具を保持することなどを考慮すると、古い武器を有することで伝統性を保持していることを示すとともに、最新の刀装具を装着することで、（地域を支配するための正当性を表す）伝統性と、最先端を行くという最新性を共に表現していたと考えます。

また、複数の被葬者が連続して象嵌装付大刀・剣を有することは継続的に畿内王権と結びつきを持っていたことが考えられるとともに、象嵌装大刀が示す職掌・出自などを継続的に王権から重要視されたと想定できます。象嵌装大刀が複数出土した沼津市（旧戸田村）井田松江17号墳の調査を実施された滝沢誠氏は、象嵌装大刀を複数有する古墳について、海上交通など東西交流を担う被葬者像を描きます（滝沢2001）。中原4号墳の二人の被葬者も東西交通や流通に関与したと考えられます。

まとめ

初葬者と追葬者の副葬品を比較すると、数量に差異があるものの同じような文物が副葬されていることがわかります。被葬者2名は副葬遺物からみれば時期差はお



中原 4 号墳（象嵌装大刀）

図5 波状C字文象嵌刀

Scale=1:2

むね 10 ~ 20 年ほど間隔があります。親子か兄弟か断定はできませんが、階層的にはほぼ同階層で、同様の職掌（職業）であったことが想定されます。

初葬者は、簡易な馬具とその分布の特徴などから鍛冶技術、馬匹生産などの複数の手工業技術を有していたことが想定できるとともに、象嵌装大刀からは広域的な活動を行っていたことが想定されます。

追葬者は、副葬遺物が類似することから初葬者の性格を引き継ぎながらも、東駿河で共通する大型矩形立闇円環櫛を有していることから馬匹生産や騎馬集團としての役割を持っていた被葬者像が描けます。

このように中原 4 号墳は、階層的にはそれほど高くはないものの馬匹生産、鍛冶生産など様々な手工業技術をもち、広域の交流も行なながら畿内王權に奉仕した集團を直接指揮したような被葬者像を描けます。

参考文献

大谷宏治 2008 「瓢形環状鏡板付骨の特質」『静岡県考古学研究』

40 静岡県考古学会

大谷宏治 2016 「疑似頭表現のある鎧金具の特質」『静岡県考古学研究』47号 静岡県考古学会

大谷宏治 2016 「兵庫道立闇素環状鏡板付骨の特質」『研究紀要』5 静岡県埋蔵文化財センター

岡安光彦 1986 「馬具副葬古墳と東国合入騎兵」『考古学雑誌』

71巻4号 日本考古学会

瀬沢 誠 2001 「總括」「井田松江古墳群」戸田村教育委員会

富士市教育委員会 2016 「伝法中原古墳群」

宮代栄一 2015 「熊本県球磨郡多良木町赤坂古墳出土遺物の研究」『熊本古墳研究』6 熊本古墳研究会

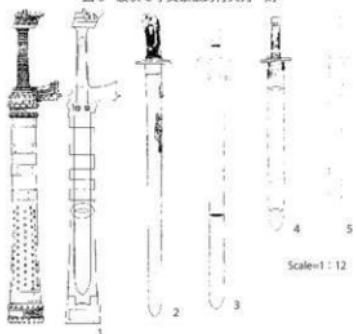
*出土遺物の図の出典は省略しました。

耳象嵌銅（八窓銅） 耳象嵌銅（六窓銅）



1 大分県ガランダヤ2号墳 2 大阪府大石山墳 3・9 中原4号墳
4 千葉県椎名塚9号墳 5 大分県上ノ原40号墳穴室 6 千葉県鹿谷山3号墳
7 同上県奥田古墳 8 宮崎県瓜生野30号墳穴室

図6 波状C字文象嵌銅付大刀・剣



1 奈良県藤原木古墳 2 鹿児島県中尾8号地下式横穴墓
3 鳥取県福本70号墳 4 千葉県鹿谷29号墳
5 中原4号墳

図7 古墳時代後期の剣



中原4号墳の鉄鎌について

菊池吉修

1. 鉄でできた“やじり”

古墳に副葬された武器の一つに、弓矢がある。しかし、多くの場合、弓矢の素材は有機質であり、古墳から出土するのは、そこに使われていた金属属性の部材のみとなる場合が一般的である。中原古墳群では、「矢」の先端にあたる鎌が出土した（図1）。鎌の素材には、石、青銅、鉄のほか、骨等の有機質のものもあるが、中原古墳は、鉄製の鎌（鉄鎌）が出土した。古墳時代後期の古墳出土品として、鉄鎌は決して珍しいものではない。中長距離攻撃用の武器である弓矢は、当時における一般的な武器の一つであったといえる。

古墳時代における弓矢の研究では、鎌の形状について進展が著しく、時期的変遷や地域的特性が解明されている。また、副葬される本数や組成から、被葬者の社会的立場等がうかがえることも指摘されている。そこで、中原4号墳の鉄鎌について、本数と形状等の特徴から被葬者像に迫ることしたい。なお、鉄鎌の出土位置は、大きく5箇所に分かれるが、編年の位置付けからE・F工

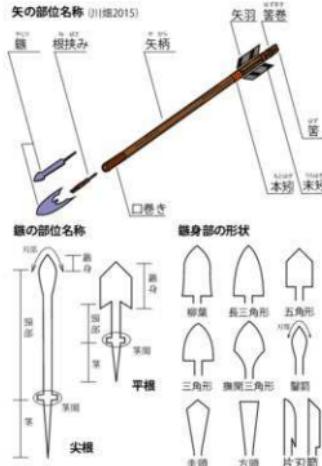


図1 矢の構造と鎌の形状

リアの一部とCエリアの出土を除く、大半の鉄鎌が初葬に伴うものと考えられ、中原4号墳の鉄鎌の持つ特徴は初葬者の社会的立場等を反映したものといえる。

2. 鉄鎌の形状が示すもの

鉄鎌はその形状から大きく二つに分けられる。一つは、「平根」と呼ばれる幅広のもの、もう一つは「尖根」と呼ばれる細身のものである（図2）。

中原4号墳からは、131点の鉄鎌が出土し、このうち平根が43点、尖根が53点である。平根は形状が極めて多様である一方で、尖根は柳葉式、撫問式、片刃筋式の3種に限られる。多様な平根鎌のうち、特に注目したいのは、一つは方頭式、もう一つは主頭式である。

鎌身體には地域的な偏りがあり（図3）この時期の畿河で一般的にみられる平根の鎌は、三角形式、長三角形式、五角形式であり、いずれも中原4号墳でも出土している。一方、方頭式と主頭式はこの時期、九州～瀬戸内、撫問三角形式は畿内にそれぞれ分布の中心を持つ形態である。なお、中原4号墳の主頭式の中には、頭部と茎部の境にあたる茎間が、左右に突出する「棘間」と呼ばれる形態をなすものがある。また、方頭式は通常、鎌身に

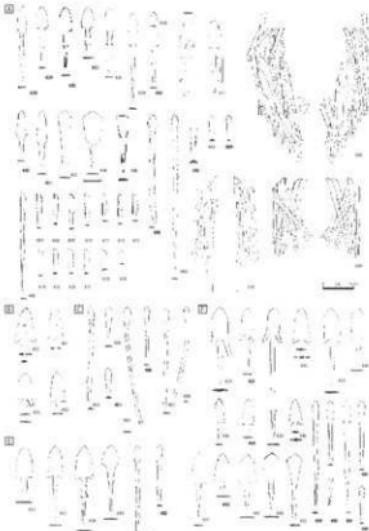


図2 中原4号墳出土鉄鎌

直接「茎」が接続するが、中原4号墳出土のものは「頭部」を介する。このような輪闇を持つ主頭式や頸部を持つ方頭式は、分布が西日本に偏る主頭式や方頭式の中でも、福岡県と岡山県など限られた地域でのみ出土が確認されている。

3. 出土数の持つ意味

冒頭で触れたとおり、鉄鏃は後期古墳からの出土品としては決して珍しいものではない。しかし、各古墳の出土量には違いがある。東駿河・伊豆の鉄鏃出土古墳のうち、その半数以上は出土量が10点以下である。20点を超えると、鉄鏃多量副葬古墳といわれるが、当地域で20点を超えるものは2割に満たず、中原4号墳の131点というのは突出した出土量である。

なお、埋葬施設の規模と鉄鏃出土量は比例しない。むしろ鉄鏃多量副葬古墳は平均的な規模の古墳であり、中原4号墳もこの傾向に沿ったものである（図4）。鉄鏃多量副葬古墳の被葬者は社会的地位がトップクラスとはいえないものの、鉄鏃の流通や生産に関与したと考えている。中原4号墳の鉄鏃の形状は多様性に富むものの、尖根は柳葉式と盤箭式、片刃箭式の3種に集約される。主体を占める片刃箭式は例外的な2点を除き、鏃身間に角間ないしは極浅い脇抜、茎間が輪闇という共通性を持つ。規格性が高い一群を持つことから、鉄鏃生産の場から直接的に鉄鏃を入手したものと考えられる。

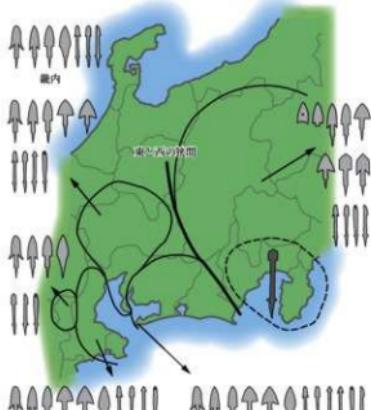


図3 6世紀後半の鉄鏃の地域性（大谷2003）

4. 鉄鏃からうかがえる被葬者像

以上、中原4号墳の鉄鏃は、東駿河の一般的形態に西日本の特定地域に分布する形態を加えた鏃構成という特徴を持ち、地域でも突出した量の鉄鏃の保有と規格性の高い鏃群の存在から、被葬者は鉄鏃の生産・流通の中心に近い立場にいたと考えられる。

さて、主頭式の特徴で注目した「輪闇」は、6世紀後半に出現し、一齊に列島各地に広がる。また、この時期には方頭式のように西日本から分布域を広げるタイプがある。輪闇は高句麗でも酷似したもののが報告されているが、その出現と拡散、西日本型の鉄鏃形態の拡散の背景には、高句麗と倭との関係が指摘される（水野2007）。

平根の鏃はその形態に象徴性を持つといわれる。鉄鏃生産に近い立場にいたとみられる中原4号墳の被葬者は、半島との関係性を含めた島嶼規模での鉄鏃生産の動きの中にいたと想定され、平根鏃の多様性に、自らの本拠地と広域的な交流関係を指し示したものと理解される。

【参考文献】

- 川畑 篤 2015『武具が語る古代史』古墳時代社会の構造転換 京都大学学術出版会
水野敏典 2007『古墳時代鉄鏃研究の諸問題』古代武器研究 第8号
大谷宏治 2003『遠江・駿河・伊豆における古墳時代後期の鉄鏃の変遷とその意義』『研究紀要』第10号（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

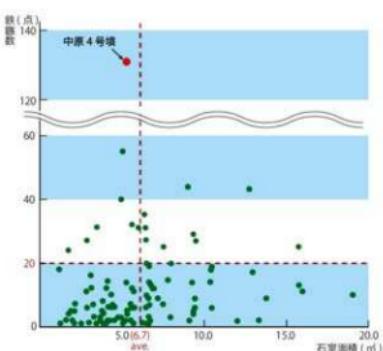


図4 埋葬施設の規模と出土鏃点数

生産用具からさぐる

中原4号墳の被葬者像

鈴木一有

はじめに

中原4号墳からは、多くの生産用具が出土した。その内訳は、刀子4、斧3、鎌5、蟹1、鍛3点、鍛鋤先4、砥石2点、鉄鉗1、針14以上、羅子1であり、10種類38点以上を数える。一般的に生産用具の副葬が衰退する古墳時代後期において、この種類と量は全国的にみても注目しうる充実ぶりといえる。なぜ、直径8mの小円墳にこれだけの生産用具が副葬されたのか、被葬者の性格について考えてみたい。

1. 生産用具副葬の意義をめぐる解釈

古墳出土の農工具については、情報が豊富な前・中期を中心に、副葬する意味についての考究が深められてきた。寺沢知子は、前・中期古墳に副葬された鉄製農工具

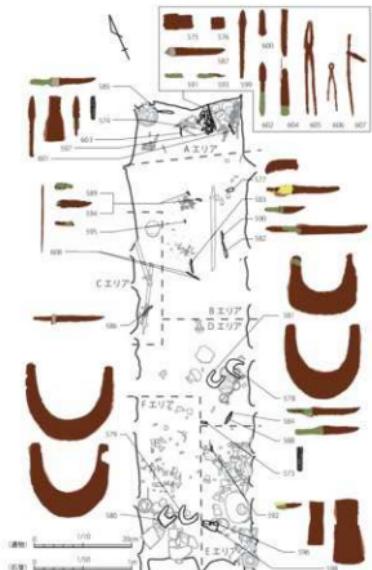


図1 中原4号墳出土の生産用具

の組合せや出土状態を検討し、副葬された農工具を首長が担う農耕儀礼の執行権を示すものと解釈した。白石太一郎も、農工具を象った石製模造品の分析を通じ、副葬農工具は農耕儀礼を実修する司祭者（首長）が用いる神まつりの道具と評価した。広瀬和雄は古墳副葬農工具について田畠を切り開く効農の象徴物と捉え、共同体を維持繁栄させる首長の役割を示す財の一つとみなした。

こうした前・中期古墳にみられた祭儀の内容は後期になると著しく変容する。白石は奈良県藤ノ木古墳から出土した農工具の分析を通じて、古墳時代後期における農工具副葬の意義を探り、6世紀以降、倭王權中枢の限られた階層が前期以来の農耕儀礼の司祭者としての性格を濃厚に残すいっぽうで、地方を含め多くの首長層は農耕儀礼にあまり拘泥しなくなると捉えた。

こうした問題意識の延長上で、改めて中原4号墳の事例に注目すると、農工具以外にも鉄鉗や針・羅子といった、他の生産用具とみられる製品が共存している点が注目できる。鉄鉗は、鍛冶具の最も基礎的な用具として注目されている。その副葬行為についても、鉄器生産を統括・管理する首長の性格や、鉄器生産に直接かかわる渡米系集団の職能を表すものと捉えられている。

古墳に副葬される針についても、生産用具の副葬行為をその用具を用いた手工業生産と関連づける文脈に沿って解釈すれば、その副葬は布・皮革製品の生産と関わる表象行為と捉えることができるだろう。

このように、中原4号墳から出土した生産用具は、農工具副葬の変容過程にある6世紀の実例を具体的に示すだけでなく、鉄器生産や布・革製品の生産ともかかわり、後期古墳における手工業生産用具の副葬行為の意味を総体的に分析すべきことを伝えている。

2. 鍛冶具副葬の意義

中原4号墳からは鉄鉗が1点、出土している。鉄鉗の出土例は東海地方で唯一であり、東日本においても、類例が極めて限られる。以下、鉄鉗と関連する鍛冶具副葬の意義について整理しておきたい。

中原4号墳から出土した鉄鉗は、全長19.3cmの比較的小型の製品である。鉄鉗は大きさの違いに注目することが多い。ここでは、全長20cm未満を小型品、20cm以上40cm未満を中型品、40cm以上を大型品と捉えた。この基準に照らせば中原4号墳例は小型品に位置づ

けられる。

鉄鋸の大きさは金属加工で用いる工程や技術力の違いを反映したものと解釈できる。大～中型品は鍛冶用具として捉えて問題ないだろう。とにかく、全長30cm以上の大型品や中型品の一部は、片手で扱うことができず、複数の工人がかかわる作業に使われたものと捉えられる。いっぽう、本例のような小型品は片手で

扱える大きさであり、修復や簡易な加工など、より小規模な作業に使用された用具と評価できる。

古墳出土の鍛冶具については、鉄器生産・加工技術の推移を直接的に示す資料として古くから注目されてきた。その中心となる道具が、製品を挟む機能をもつ鉄鋸であり、さらには充実した組合せが見られる場合、鉄鋸、鑿、鉄砧、鍛などのが共伴する。

中原4号墳出土の鍛冶具組成を評価するために、鉄製鍛冶具の組合せを以下のように分類する。

A類) 4種の鉄製鍛冶具(鉄鋸、鉄砧、鑿、鉄砧の組合せ)が揃う事例

B類) 2～3種の鉄製鍛冶具が共伴する事例

C類) 1種類の鉄製鍛冶具が出土する事例

このうち、C類は、鉄鋸のみが確認できる類型が主体といえ、中原4号墳を含め、東日本地域の鍛冶具出土例はこの類型に限定できる。1点の鉄鋸を副葬することは、鍛冶具副葬の最も基層的な行為であると認識しよう。

日本列島において鉄鋸を中心とする鍛冶具が出土しはじめるのは、古墳時代中期前葉のことである。古墳時代



図2 鉄製鍛冶具の分布

中期の鍛冶具出土古墳は北部九州をはじめ、岡山県域、奈良県域などに集中する傾向があり、鉄器生産の中心地をあとづけることができる。

近年、朝鮮半島南部における鍛冶具の出土例が激増している。朝鮮半島における鍛冶具の組合せを先の分類に従って整理すると、日本列島の事例と比べて種類が充実しているA類やB類の割合が高い。鍛冶具の副葬行為は日朝に共通し、その量や種類の違いが鉄器生産力の差を反映しているものと解釈できるだろう。朝鮮半島南部における鍛冶具副葬は、古墳時代前後に併行する時期にもみられるが、中期から後期にかけて出土例が集中する点は、日本列島と共通する。鉄鋸をはじめ、鍛冶具個別の大きさが多様であることも留意したい。中原4号墳例のような小型品も朝鮮半島から一定量が認められるので、鉄鋸の大きさの違いは鍛冶の場面や從事者数の違いなどを反映した機能差に起因する可能性が高いとみられよう。

朝鮮半島南部地域における鍛冶具出土古墳は、洛東江以東の地域に偏りがある点も留意したい。日本では鉄器



図3 鉄鋸の使用状況 左：大型品 右：小型品

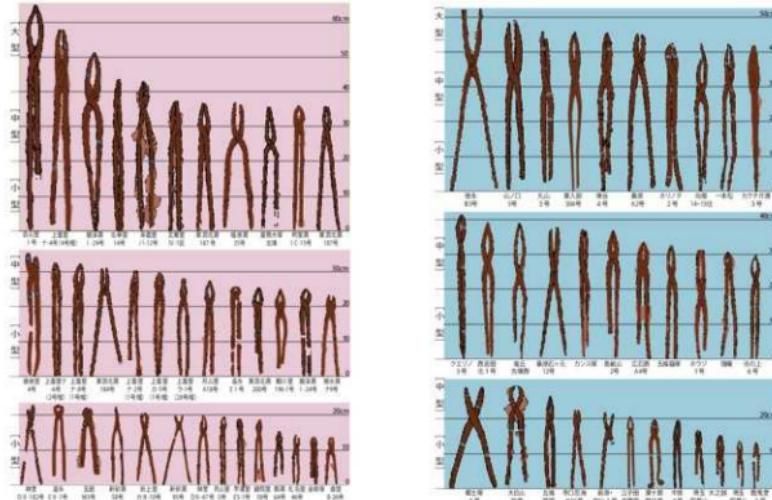


図4 日朝の鉄鋤 左：朝鮮半島出土品、右：日本列島出土品

生産の中心地として加耶地域が注目されているが、朝鮮半島南部全体で比較すれば、鍛冶具出土古墳の分布の中心は、新羅の領域にあるとみなせる。日本列島の鍛冶技術の淵源地として、新羅の領域を視野に入れた検討が求められるだろう。

鍛冶具副葬古墳の様相を古墳の時期、出土地、出土した鍛冶具の種類などから整理すると、鉄器生産技術の伝播過程とその定着度がうかがえる。朝鮮半島における分布の核は新羅の領域を中心とした洛東江東岸域にあり、古墳時代中期前葉から中葉にかけて北部九州や岡山県域、奈良県域といった西日本地域に伝播する。東日本への移入は古墳時代中期後葉以降であり、西日本地域と比べて遅れる傾向がある。また、東日本では副葬される鍛冶具が小型品の鉄鋤に限定され、鉄器製作工程の複雑化という視点においても西日本地域との違いがある。6世紀以降も、東日本地域では小型の鉄鋤のみを副葬することが存続することを考慮すると、鉄器製作にかかる東西差は少なくとも6世紀までは顕著であったと解釈できよう。このように、副葬鍛冶具の充実度の違いは、日本列島内における鉄器生産能力の違いを示すものと捉えられる。

鍛冶具の副葬には、鉄器生産の統括者としての首長の性格や直接的な鉄器生産者としての職能が示されると解釈される。小規模な古墳である中原4号墳の事例は、両者の性格を併せ持つものといえる。当墳では鍛冶具以外の生産用具も豊富に出土していることを重視すると、中原4号墳における鉄鋤の副葬行為は、地域における手工業生産を統括する中で鉄器生産にかかる技術集団も統率する役割を担った被葬者の職能を表象するものと捉えておきたい。

3. 後期古墳における生産用具副葬の意義

さいごに中原4号墳で出土した豊富な生産用具の副葬の意義について触れておきたい。鉄製農工具の副葬・埋納事例として、種類や量が最も充実しているのが、古墳時代中期前半である。この時期を頂点に後期に至ると生産用具の副葬事例は急速に少なくなる。6世紀における生産用具の副葬状況は地域ごとの相違が顕著である。縮小傾向はあるものの、西日本地域では生産用具の副葬行為は残存する。なかでも、北部九州や愛媛県域、奈良県域などに農工具を多く副葬する古墳が目立ち、その他の地域との差異が顕著である。

筑紫を中心とした北部九州においては、農工具を3種類以上副葬する後期古墳が首長墓および中小規模の古墳とともに一定量認められる。また、鉄鋤を中心とする鍛冶具を副葬する後期の中小古墳が多いことも特徴的である。さらに、愛媛県域や奈良県の葛城地域においては比較的小規模な古墳を中心に農工具が豊富に副葬されている。これらの地域は、古墳時代中期から後期にかけて、渡来系集団が集中して移動した地域と評価でき、生産用具を出土する小円墳には、渡来系技術者集団をその被葬者に想定できるものが多い。

在來の古墳祭祀の中に生産用具を豊富に副葬する伝統がみられないことをふまえると、中原4号墳における生産用具の副葬行為に、被葬者の出自や職掌などを積極的に読み取ることが許されよう。古墳に副葬される生産用具については、地飼用具や建築用具などと限定するのではなく、広く農耕・手工業生産にかかわる儀礼用具と捉えておく方が妥当と考えられる。

鉄鋤の副葬には、鉄器生産や加工技術に長けた技術者集団との密接な関係を想定することができる。東駿河の地において鉄器の生産や加工に従事した集団の中には渡来人が含まれていた可能性も充分想定できるだろう。また、特異ともいえる豊富な生産用具の副葬行為からは、中原4号墳の被葬者が、北部九州や、愛媛県域（今治・松山地域）、奈良県域（葛城地域）といった生産用具を豊富に副葬する地域と何らかの関係をもっていた可能性も指摘しうる。

これらの地域には、渡来系の埋葬施設である堅穴式横口式石室や、段構造をもつ無袖石室が多くみられることも注目できる。中原4号墳に築かれた横穴式石室の系譜を考究する上でも、石室形態が共通するこれら遠隔地との関係を想定する視点が求められるだろう。

まとめ

中原4号墳から出土した豊富な生産用具の特徴を整理する作業を通じ、後期古墳における生産用具を用いた祭祀の変容過程に触れた。とくに、手工業生産や加工技術に長けた中小勢力には生産用具の副葬が残存し、遠隔地どうして集団間の関係が想定しうることは重要である。中原4号墳から出土した須恵器は数や種類が多く、生産地も複数にまたがるとみられる。豊富な副葬須恵器の様相から判断すると、中原4号墳の被葬者は須恵器の生産



図5 後期古墳出土の生産用具

主体とも密接な関係を有していたと解釈しうる。外來系器種である把手付碗の保有は、この古墳の被葬者が渡来系集団と関係をもっていた可能性も指摘できる。

中原4号墳から出土した武器や馬具は、日本列島の各地で共通する特徴がうかがえることから、その入手の経緯には、倭王権の関与があったことがうかがえる。100点を超える鐵鎌の出土量は周辺の古墳と比較しても群を抜いており、本墳の被葬者が極めて武人的な性格を強く帯びていたことが理解できよう。また、本墳から出土した武器や馬具は必ずしも最高位の首長の持ち物とはいえないことも重要である。武器や馬具に明確な階層性が看取できることを考慮すると、その流通、保有の背後には倭王権の統制力が働いていたとみることが妥当であろう。

中原4号墳から出土した玉類には、愛知県西部（尾張）以西の西日本にみられる諸特徴が看取できることも注目できる。この検討結果は、中原4号墳の被葬者が西日本地域と強い繋がりをもっていたことを伝えるものである。石室や生産用具副葬の評価とも整合的な西日本地域との関係は、手工業技術の東方移転のあり様を考える上でも示唆的である。

中原4号墳の被葬者には、倭王権との軍事的な結びつきを前提に、近畿地方や西日本地域の渡来系集団と関係をもち、駿河の地に新たな産業をもたらした技術者集団の統括者としての性格を読み取ることができる、と結論づけることができるだろう。

*参考文献等は「伝法 中原古墳群」筆者考察を参照。

中原4号墳出土須恵器の様相

和田達也

はじめに

中原4号墳の玄室からは豊富な須恵器が出土しています。須恵器は、専用の窯を用いて1,000°C以上の高温で焼き上げた灰色の土器です。5世紀初頭頃に製作技術が朝鮮半島から日本列島へ伝わりました。須恵器は、数多くの古墳から出土し、時期差の検討に用いられています。古墳から出土した須恵器は、古墳を造った時期や埋葬の時期と回数を推定することができる資料のひとつです。中原4号墳から出土した須恵器の特徴について紹介し、中原4号墳の築造時期や埋葬の時期と回数について触れます。また、中原4号墳とその周辺の古墳から出土した須恵器の特徴や器種構成と比較し、須恵器から見た中原4号墳の被葬者について考えます。

1. 出土須恵器の特徴

中原4号墳から出土した須恵器は、6世紀後葉を中心とした時期に生産されたと捉えられるものが主体的です。器種とその出土量は、合計で7器種29個体がみられます。なかでも把手付碗の所有と器種や特徴の多様性が注目できます。

2. 中原4号墳の造営時期と諸行為の時期

中原4号墳に副葬された須恵器は、5世紀前半に生産された可能性があるもの（Ⅰ期）、6世紀中頃（Ⅱ期）、6世紀後葉（Ⅲ期）、6世紀末から7世紀初頭（Ⅳ期）の4つの時期に分けることができます。

これらの須恵器の時期と出土状況の相関性をみると、玄室の床面に接した状態で出土するものはⅠ～Ⅲ期のものに限られ、中原4号墳の築造と初葬は6世紀後葉を中心とした時期に行われたと捉えられます。また、Ⅳ期に生産されたと捉えられるものは玄室の床面からやや浮いた状態で出土しており、追葬に伴うものと考えられます。Ⅲ期に生産されたものの中にも床面から浮いた位置で出土したものもあり、追葬に伴い移動された、もしくは、搬入された可能性がうかがえます。須恵器の形態差や出土状況からは、初葬後、追葬などの行為が2回以上に行わ



図1 中原4号墳出土土器

れたと想定できます。初葬時に用いられたと捉えられる須恵器には口縁部や底部に磨耗や欠損がみられ、古墳に副葬される前に使用されていたことがうかがえます。葬送儀礼に際し、新たに調達されたものではなく、使用された器物が副葬品として納められたと言えます。

3. 須恵器の多様性

同時期のものと捉えられる同一器種の形態差や粘土の違い、焼き具合から最低3箇所の生産地から搬入されたと想定できます。环類やハソウ・壺・提瓶・横瓶で複数個体の副葬が認められますが、いずれの器種においても同じ形態のものもなく、産地や窯の操業段階の違いが想定できます。

中原4号墳と同時に造られた周辺の古墳では、多様な器種を持つ古墳はあるものの、中原4号墳のように貯蔵具の同一器種を多く所有する事例はみられません。また、周辺の古墳から出土した須恵器には、色調や形態に統一感が認められます。中原4号墳出土の須恵器は、他の古墳に比べて複数の産地からもたらされていることが認識できます。

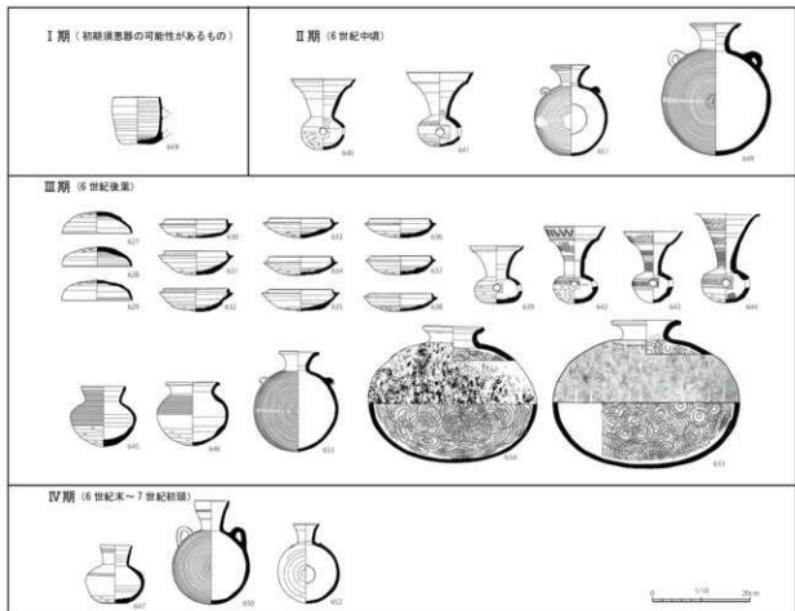


図2 中原4号墳出土須恵器の時期

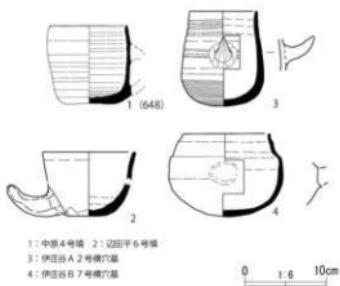


図3 中原4号墳出土把手付碗と6世紀代の把手付碗

4. 把手付碗について

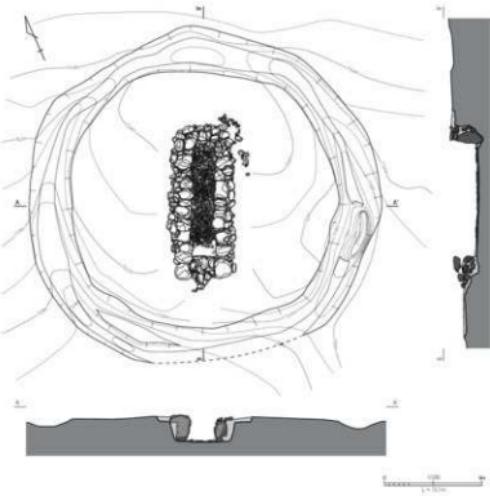
把手付碗は、一般的に5世紀前半を中心とした時期に生産された器種です。中原4号墳から出土した把手付碗は、円柱状の形態で、側面には現在は欠損していますが、環状の把手がひとつついていたと考えられます。口縁部の先端部分は丸く整形されています。一緒に出土した須恵器とは、原料とした粘土の質や調整の方法などに大きな違いが認められます。しかし、形態が単純で、焼成具

合はと一緒に出土した須恵器に類似したものがあり、6世紀代に生産された可能性も否定できません。

なお、5世紀前半に生産された場合には、生産から副葬までに100年以上の伝世期間を経て、副葬されたと考えられますが、県内の事例において100年にわたり伝世した事例は知られていません。いっぽう、県内において6世紀に生産された把手付碗の事例は3例確認できますが、いずれも角状の把手をもち、焼成具合は、在地で生産されたと判別できるものです。

5. 中原4号墳の被葬者像

中原4号墳の被葬者は複数時期・複数产地の須恵器を入手・保有できる立場にあったと考えられます。中原4号墳の製造時期は、駿河地域において須恵器生産が開始された時期にあたります。初葬の時期よりも、100年以上古い（古く見える）把手付碗の所有や副葬された多様な須恵器の所有からは、中原4号墳の被葬者が須恵器生産の導入や管理に指導力を発揮した人物（集団）であったことを示していると考えられます。



中原第4号墳 墳丘測量図

平成29年度 中原第4号墳出土品市指定文化財記念シンポジウム

『中原第4号墳の被葬者に迫る』資料集

発行年月日 平成30年1月21日

編集・発行 富士市文化振興課
〒417-8601 静岡県富士市永田町一丁目100番地
TEL 0545-55-2875 FAX 0545-53-0789
E-mail:si-bunka@div.city.fuji.shizuoka.jp